

## 平成 31 年度を振り返って

定年最後のこの年は、忘れられない一年となりました。様々な議論の中、年号が平成から令和に変わり、ある意味一つの区切りを感じました。更には、年度末から世界的に流行してきた新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の対応に追われました。これまでも毎年想定外の出来事はありませんでしたが、年度内に何らかの対応を講じてきました。しかしこの感染症は、長期に渡って様々な決断と対応が必要な状況となりそうです。



それはさておき、まずは今年度の目標から一年を振り返ってみたいと思います。今年度は、「新病院に向けて構築すべき体制整備」と「病院機能評価受審」が必須であり、目標を「考動する組織を目指して」として活動してきました。前年度に引き続き 3 つのプロジェクト「病床管理」と「看護提供体制」、「外来看護体制」を具体的に始動させていきました。この活動の 1 年を振り返りたいと思います。

プロジェクトの 1 点目「病床管理」は、昨年に引き続き病床管理の一元化と入院前から退院後の生活を見据えた支援を図るための「PFM(Patient Flow Management)」の導入を検討していきました。新病院での導入を目指し、現病院で出来ることから開始するため、病床管理部門を入院支援センターに移管し、緊急入院・転棟の一元化を図りました。次年度は更に、予定入院の調整をどの様にしていくかを検討し、PFM のフローや組織を検討したいと考えています。

次に「看護提供体制」は、文献学習や各部署での検討を重ねた上で、ハイケア病棟を除き、全ての部署を「固定チームナーシング」に変更することに決めました。在院日数が短縮していく中でも看護の継続性を図ることを主眼とし、人材もチーム全体で育成することで個々の負担感の軽減を図れると考えました。工程表を作成し、新入看護職員が入職する前の令和 2 年 2 月には全ての部署が導入開始できるように計画しました。計画通りに実施することができ、次年度はその評価を行い、検証していく予定にしています。

最後に「外来看護提供体制」ですが、急性期病院に求められる「診療の補助」業務を明確にし、「継続看護」を充実させていくことが必要です。入院前・退院後、外来通院患者のカンファレンスを見直し、回数を重ねることで、外来看護師本来の責務が見えてきました。新病院での外来看護提供体制も、固定チームナーシングを導入する方向とし、外来看護師のジェネラリストとしての力量を高めていくことが必要となってきました。次年度は、PFM に連動できる継続看護の具体化と外来業務の再構築としての共通化を図っていきたいと考えます。

病院機能評価では、看護部が中心となる「症例トレース」に力を注ぎ、サーベイヤーからはチーム医療の素晴らしさを称賛され「とてもいいものを見せていただいた」というコメントも頂くことができました。病院機能評価を通して、改めて日々の看護実践の素晴らしさを確信しました。

看護部長として 8 年間、様々な課題に直面してきましたが、看護部全体はもちろん、様々な部門から支援を頂いたことで乗り越えることができたと思います。この広島市立安佐市民病院に入職し、育てて頂き、この病院から卒業できることは、感謝の一言につきます。‘患者さんのために出来ることを常に考える看護のココロを大切に、協働の力を最大限に活かす’看護部であり続けてほしいと思います。

広島市立安佐市民病院  
副院長（事）看護部長 中野 真寿美

2020.6.18 ご逝去されました 心からご冥福をお祈りします